

# 日本語教育のための文法研究

大阪府立大学教授 野田 尚史

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究について情報をおとどけしています。今回のテーマは日本語教育のための文法研究です。

## 教育のための研究と研究のための研究

日本語教育のための文法研究には、二つのものがあります。「教育のための研究」と「研究のための研究」です。

「教育のための研究」は、授業のときに文法の説明をうまくおこなうとか、学習者の質問にわかりやすく答えるというような目的でおこなう日常的な研究です。

「研究のための研究」は、学会などで研究発表をしたり、学会誌などに載せる論文を書いたりするための、特別な研究です。

## 教育活動から生まれる文法研究

教育のための研究と研究のための研究は、連動しているほうがよいと思います。教育のための研究は、研究のための研究に発展する方がよいでしょうし、研究のための研究は、教育活動に役立つものであるのが理想的です。

最近、日本語の文法研究が進み、品詞の分類とか、「は」と「が」の使いわけ全体というような、大きなテーマでは、新しい研究ができなくなってきています。そういう大きな研究ではなく、教育活動の中で見つけた、小さなテーマで、実証的な研究をするのがよいと思います。

ここでは、教育活動の中からどのようにして研究テーマを見つけたらいいのかを、具体的な例をあげて説明していきましょう。とくに、論文を書くためには、ほかの人が気づいていない、おもしろいテーマを見つけられるかどうか重要です。ほんとうにおもしろいテーマを見つけられれば、もう論文の半分ができたようなものです。

## 教科書から問題点を見つける

日本語の教科書をよく見ていくと、文法の扱い方がうまくいっていないものが見つかります。そのような小さな問題点から始めてみるのもよいと思います。

私が日本語の教科書で見つけた問題点の例の一つあげ

てみましょう。

ある教科書では、使役受動形の作り方について、次の(1)のような文法説明があり、(2)のような例文があがっています。

- (1) 使役形に、受動の語尾「-rareru」をつける
- (2) 田中さんが本を買わせられる。

そして、練習では、次の(3)のような例があがっていません。

- (3) 先生は私を待たせます。

私は先生に待たされました。

(1)の文法説明と(3)の例を見て、おかしいと思いませんか？ (1)の文法説明のとおりに使役受動形を作ると、(3)は「待たされました」ではなく、「待たせられました」になるはずですが。

このような問題点を出発点にして、使役受動形として、実際にはどのような形が使われているのかを調査してみるのもよいでしょう。話しことばと書きことばによる違いや、文章のジャンルによる違い、時代による違いなどがわかれば、さらにおもしろい研究になるはずですが。

## 学習者の質問から問題点を見つける

学習者の質問の中には、日本語の文法を深く考えるきっかけになるようなものがあります。

私は、初級のクラスで受動文を教えているときに、「受動文の作り方はわかったが、受動文というのはどんなときに使うのか？」という質問を受けたことがあります。

これは、かなりむずかしい質問です。次の(4)と(5)は同じ事態を表す能動文と受動文ですが、日本語では、受動文の(5)のほうが自然な場合が多いでしょう。

- (4) 受付の人は私に住所と名前を聞きました。
- (5) 私は受付の人に住所と名前を聞かれました。

日本語では、「私」が主語になろうとする傾向が強い

ので、(5)のほう好まれるのですが、このような傾向は言語によって違います。ですから、これは、日本語とほかの言語との対照研究のテーマにもなるでしょう。

また、受動文は、次の(6)のように、複文の従属節の主語と主文の主語を一致させるために使われたり、続いている文と文の主語を一致させるために使われることもあります。

(6) 私は住所と名前を聞かれたので、答えました。

このような研究は、複文や、談話・テキストの研究に発展していく可能性があります。

## 誤用例から問題点を見つける

教育活動の中で文法研究のテーマを見つけるのにいちばんよい方法は、学習者の誤用例を見ることでしょう。

たとえば、日本語や日本文学を専攻している大学院生のような人でも、次の(7)のような誤用が見られます。

(7) 夏目漱石のイギリス留学は、その後の彼の文学作品にどんな影響を与えましたか。私は、この問題について考えてみたいと思います。

(7)の最初の文の「与えましたか」は「与えたか」にしないで不自然です。「です・ます」を使って話をするときは、全部の文を「です・ます」で統一しなければならないと言われることが多いのですが、このように「です・ます」にしてはいけない文もあります。このようなことは、誤用例を見なければ、なかなか気がつきません。

誤用例は自分で見つけるのがいちばんいいのですが、たくさんの誤用例を調べたいときには、たとえば、インターネットの次のサイトにある「寺村誤用データ」や「日本語学習者の作文コーパス」を見てください。

<http://cookie.lang.nagoya-u.ac.jp/pub/>

## 日本語の精読から問題点を見つける

中級や上級の授業で、新聞や小説を読んだり、テレビやラジオの番組を聞いたりするときに、一つ一つの文の構造や機能をしっかり見ていくと、ふだんは気がつかない文法の問題が見つかることがあります。

たとえば、次の(8)の「電話で話すほうが」は主語だとは言えません。主語は「私は」だからです。

(8) 私は、面と向かって話すより電話で話すほうがうまく話せる。

これは、「電話で話す」とのような仮定条件節が、「面と向かって話す」と比較されて、「電話で話すほうが」になったものだと考えられます。

このように、「が」のような簡単な助詞でも、詳しく

見ていくと、研究に発展しそうなテーマが見つかることがあります。

## 研究を発表したり、論文にまとめたりする

研究を学会などで発表したり、論文として学会誌などに発表するとき大事なことが二つあります。

一つは、研究発表らしい研究発表にしたり、論文らしい論文にすることです。そのためには、研究発表を聞いたり、最近の論文をよく読んで研究することが必要です。

もう一つは、内容が、これまでだれも発表していない、オリジナルなものになっていることです。それを知るためには、できるだけ新しい情報を集めることが必要です。

日本の大学図書館などに収蔵されている本の検索は、インターネットの次のサイト(学術情報センターのNACSIS Webcat)が役に立つでしょう。

<http://webcat.nacsis.ac.jp/>

日本語関係の本の検索と購入は、次のサイト(凡人社オンラインショップ)が便利です。

<http://www.alc.co.jp/bos/>

論文については、1年に1冊発行される、国立国語研究所(編)『国語年鑑』(1995年版までは秀英出版、1996年版より大日本図書)を調べるのがいちばん確実です。

次のサイト(国立国語研究所)には、『国語年鑑』の1985年版までの論文データなどがあります。

<http://www.kokken.go.jp/>

これから、インターネットで公開されるデータはさらに増えていくと思います。いろいろ探してみてください。

## 基本的な参考文献

- 文法の考え方を学ぶには  
野田尚史『はじめての人の日本語文法』くろしお出版、1991
- 日本語の文法全般について調べるには  
益岡隆志・田窪行則『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版、1992
- 日本語文法の主要なテーマについて知るには  
北原保雄(編)『講座日本語と日本語教育4 日本語の文法・文体(上)』明治書院、1989
- 誤用分析を考えるには  
明治書院企画編集部(編)『日本語誤用分析』、『続日本語誤用分析』明治書院、1997
- 日本語学の論文の書き方を知るには  
宮地裕(他)(編)『ハンドブック 論文・レポートの書き方』明治書院、1997

\* 今号からこのコーナーの名前を「日本語・日本語教育を研究する」に変更いたしました。